

6. 鷺見氏ゆかりの城跡と開拓の地にみる歴史的風致

(1) はじめに

郡上市の北部に位置する郡上市高鷺町は、「白山国立公園」や「ひるがの高原」を有する分水嶺のある高原地帯である【2-6-1】。夏は避暑地としてキャンプ、冬はスキーやスノーボード等のウィンタースポーツが盛んに行われている。また、清流長良川の源流に位置し、東には鷺ヶ岳^{わしがたけ}、西には大日ヶ岳^{だいにちがたけ}がそびえる、過去には冬期間はしばしば雪に閉ざされるところでもあった。このような厳しい自然条件のなか、先人らの努力もあって、開拓を行った地は、今では後述の“三白産業^{さんぱくさんぎょう}”を中心に農業を基盤とした観光産業が盛んである。こうした開拓とともに歩んでいる一方で、「鷺見^{すみ}」という姓が生まれた地として、またこの姓にまつわる由来や史跡が残る地でもある。



2-6-1 分水嶺公園

(2) 鷺見氏ゆかり地をめぐる城跡と伝承

1) 鷺見氏盛衰史

① 鷺見氏誕生と大鷺退治の伝承

鷺見氏の由来については、藤原北家の祖である藤原房前の子魚名の子孫である藤原頼保^{ふじわらのふささき うおな}を初代としている。頼保は、伝承によれば「或る時美濃の山間に大鷺が住むことを天聴に達し頼保命を奉じて鷹狩りにゆき、美濃国郡上郡雲ヶ嶽^{くもがたけ}（現鷺ヶ岳）に於て大鷺二羽を退治し鷺の子二羽を生捕りにして之を天覧に供したから御賞として家名を鷺見と賜り美濃国芥見庄^{あくとみ}（現岐阜市芥見）鷺見郷^{すみごう}（現郡上市高鷺町向鷺見）を永代せられた。」とある。鷺見氏末裔の編纂による『鷺見家史蹟』（大正13年（1924））という資料にもそのような伝承の記載がある。なお、鷺見郷は、大鷺退治に因んだ地名である。さらに、伝承によれば、頼保は永暦元年（1160）に向鷺見神社^{むかいすみ}に社領2石5斗余りを寄進したとあり、鷺狩並びに同地域の城山に向鷺見城を築いたと伝えられている。

② 中世の鷺見氏

実際に鷺見氏の事跡として確実になるのが、頼保の子とされる郡上太郎と称した鷺見重保^{しげやす}からとなる。建仁年間（1201～1204）に美濃国岩滝郷^{いわたきごう}（現岐阜市芥見^{あくとみ}）の小島三郎が濫妨したので、将軍は北条時政に下知して重保の所領を安堵させている。この下知状には「此重保は相伝の御家人」となり、鷺見氏はこの時期に鎌倉幕府の御家人として鷺見郷を相伝したことが分かっている。

重保の子家保^{いえやす}は武勇に優れ、承久の乱（承久3年（1221））には守護の土岐氏^{とぎ}に従って幕府側についたため、鷺見郷下司とした安堵状が与えられている。向鷺見城（鷺見城）

を築いたのも、この家保の時代ではないかと推察されている。家保の子保吉・諸保は、弘安8年(1285)に京都大番役に任じられて、上洛したと記録が残されている。

鎌倉末期の元弘3年(1333)には足利尊氏の六波羅攻撃に従軍して功績の挙げた鷺見忠保は、建武2年(1335)に尊氏が後醍醐天皇に反旗を翻したときも、尊氏方について転戦して戦功を挙げている。南北朝期の観応の擾乱の際には、鷺見保憲が足利直義方につき、忠保の子干保が土岐氏に従って尊氏方につき、一族で敵対することになった。

そして、明德元年(1390)の土岐康行の乱では、干保が軍功を賞されて、鷺見郷河西・河東地頭職を安堵されている。この頃に、鷺見氏の所領は鷺見郷のほか、東前谷(現郡上市白鳥町前谷)、牛道郷の一部(現郡上市白鳥町中西)、越前穴馬(現福井県大野市)の一部に及んでいた。

③鷺見氏の衰亡

鷺見干保の死後、勢力が衰え始めて、二日町城主安東氏世などが鷺見郷をおし取ろうとする動きがあり、篠脇城の郡上東氏にも押され始めた。干保の曾孫となる保照が、郡上東氏が以前に居城にしていた阿千葉城に居城させることになった。その理由については定かになっていないが、郡上東氏が北方に対する守りとして保照に阿千葉城に居城を命じられたものと考えられている。

保照の子貞保の代になると、東常慶との不和におちいり、天文10年(1541)に常慶は家臣に命じて阿千葉城を攻撃させた。貞保は子の千代丸を逃げさせ、城中で自害をした。不和の原因については、よくわかっていないが、天文9年(1540)の越前朝倉氏の来襲した際に、貞保が東氏側で戦う立場にありながら傍観をしたためと考えられている。これにより阿千葉城の鷺見氏は滅亡することになる。

阿千葉城を逃れた千代丸は、後の織田信長に家の再興を願い、信長の命で八幡城主遠藤盛数の所へ行き、鷺見平助正保と名乗り、大島村(現郡上市白鳥町大島)を所領した。これが大島村鷺見氏の始まりとなる。また、鷺見郷では向鷺見城主の鷺見兵庫も盛数に仕え、その子忠左衛門は盛数の子慶隆に仕え、慶長5年(1600)の八幡城の戦いに奮戦して戦死した。その前後に向鷺見城は廃城となっている。

2) 建造物

①鷺見城(向鷺見城)

- ・鷺見城跡【市史跡】
- ・鷺見城館跡
- ・鷺見神社

藤原頼保が永暦年間(1160-1161)頃、雲ヶ岳(現鷺ヶ岳)における鷹退治並びに鷺見の姓を賜り鷺見郷庄官に任ぜられ、この山を居城と定めたものといわれている。それ以来、鷺見氏は郡上東氏との争いがありつつも、城を守り続けていた。慶長年間(1596~1615)には廃城になったものと考えられている。

昭和54年(1979)に城跡を調査し、北に長良川、西南に切立川を臨む典型的な中世の山城で、支城、砦を含めてかなりの規模で中世城郭特有の遺構が原型を留めていることが

判明した。この城の特徴は、本丸入口の大手門で、東丸から約40mの間に外敵を防ぐための掘割と土塁が二重に張り巡らされていたことである。さらに、大手門は近世以降の技術といわれている「マス型門」が施されていることも判明した。【2-6-2】。また、東丸から約40mの間に外敵を防ぐための掘割と土塁が二重に張り巡らされていた。昭和45年（1970）には鷲見家会委員による城跡の清掃が行われ、道標、由緒書等が整備された。昭和56年（1981）には村主体で整備がされ、同年11月に鷲見神社【2-6-3】が建立された。



2-6-2 鷲見城跡



2-6-3 鷲見神社

②大鷲白山神社

神社の由緒書によれば、「養老年中泰澄大師白山登山ノ際当村ニ暫時逗留アリテ則チ別当社ヲ建立スト云天暦年中大内藤原政法ト云ル者鷲見郷ニ一城ヲ築キ芥見ノ庄一郷ノ主トナリ、鷲見殿ト号ス。右領主ヨリ社領トシテ高式石式斗余寄付アリソノ後天正年中ノ兵乱ニ鷲見一族滅亡ニ依リ当社モ廢頽ス享保三戊戌年七月十六日本社及拝殿ヲ際營シ村社ト崇敬ス」とある。このため、鷲見城に近接する場所にあるため、その由来と廢頽には鷲見氏が深く影響していたことがわかる。神社に残る由来書では、享保3年（1718）に再建したと記載がある【2-6-4、5】。『高鷲村史』（昭和30年（1965））によれば、本殿は縦3尺5寸、横3尺、拝殿は縦3間、横5間とある。

なお、明治41年（1908）に、正ヶ洞神社しょうがほらに中切白山神社なかぎり、穴洞白山神社あなぼら、向鷲見神社むかいずみ、同境にある姫神社と稲荷神社が合併され、大鷲白山神社となる。このため、向鷲見神社に奉納されていた懸仏が、大鷲白山神社に移された。これが、白山神社の懸仏（県重要有形民俗文化財）であり、これらの懸仏の詳細は不明が多いが、特に永仁癸巳年（1293）のものがあり、県内で見つかっている懸仏の中では最も古いもののひとつとされている。



2-6-4 大鷲白山神社（昭和35年）



2-6-5 大鷲白山神社の幣殿

3) 活動

大鷲白山神社祭礼

明治41年(1908)に大鷲4社(向鷲見、中切、穴洞、正ヶ洞)が合併するまでは、各社においてそれぞれの祭礼を行い、大神楽を奉納していた。4社の合併により、4社のおのおの特徴を合成したものとなり、今日大神楽となっている。なお、この地区は、白山信仰の関係から牛道村から伝授されたものといわれている。

現在は、大鷲白山神社礼祭行事保存会によって運営されている。この組織は、昭和52年(1977)に役者経験者と有志によって発足した。発足の理由が、練及び神楽の役者が減ってきたことを受け、役者の指導から衣装・小道具の準備を行っている。元々、各地区それぞれで練習をしていたのを1つにすることで、神楽をまとめやすくなり、また氏子が指導者を探す手間がなくなり、指導や祭礼の練習がやりやすくなった。また、平成21年(2009)に合祀100年を期に、将来の担い手である子供たちの育成を目指し、獅子、笛、太鼓など子供たちで行っている。また、文化庁の伝統文化親子教室事業を活用して大鷲白山神社礼祭行事こども教室を行っている。

秋の祭礼で奉納される芸能は、当日は「獅子舞」の神楽と「おっきり舞」、2年に1度の練の3種類がある。練は、先に2年に1度と記載をしたが、豊作の年は2年続けたり、災害の年は行われなかったりと例外もある。練は住民のほとんどが参加し、役者は氏子総代が依頼をする。練の行列は、19の役、神官、氏子総代などと一緒に行うため、約100名ぐらいの大行列となる。氏子総代の3軒での奉納が終わると、道中練りながら大鷲白山神社に向かう【2-6-6】。おっきり舞は、小学校低学年の3人が大太鼓をもってバチをたたきながら回る舞である【2-6-7】。そして、獅子舞は、1頭に大人3人が入って演じる。獅子は4頭までおり、演目は「悪魔祓い」「岡崎」「小雀」の3曲がある。獅子の他に鳴りものとして、鼓、太鼓、笛がつく。近年は、先述のこども教室で子供獅子を行っており、祭礼の後の余興として披露されている。住民や親からの評判が良く、ふるさと祭りや敬老会でも披露されてきた。



2-6-6 神社への練



2-6-7 おっきり舞

(3) 高鷲開拓の地

1) 開拓のあゆみ

①開拓前史

高鷲地域における開拓についての歴史は、近世後期から始まっている【2-6-8】。近代にいたるまでの耕作用地として利用してきたのが、現在の高鷲地域の 103.68 m²に対してわずか 5% 前後であったといわれている。現在のひるがの

(平成 4 年 (1992) に地名表記を「蛭ヶ野」を「ひるがの」に変更した。以下、平成 4 年 (1992)

以前の事項については漢字表記とする)、上野、

そして切立地域などの広大な耕作可能な土地がありながら、大正期まで開拓されていなかった。これは、やせ地などのほかに、当時の村議会議事録にもあるように、村内経済が不調で生活が困窮してきたことが大きかったといわれている。このため、明治半ばから大正初期までに、相当戸数が北海道へ移住をしていたのである。

また、大正末期から昭和初期にかけては、全国的に行われていたが、満州国へ移民する計画が進められ、郡上郡は昭和 14 年 (1939) には先駆けて郡内出身者からなる郡上村開拓団が結成されて満州に渡っている。翌 15 年 (1940) には高鷲出身からなる開拓団が満洲へ渡っている。そして、昭和 19 年 (1944) に相次いで郡出身者の開拓団が満洲へ渡ったのである。

②戦中期の高鷲開拓

開拓のため移住していった高鷲地域の人がいる一方、耕作可能な土地があるということで、大正 8 年 (1919) に揖斐郡から 6 戸の農家が移住し、国道沿いでの開田をしていたが、ほとんど離農をしていった。その中で、昭和 15 年 (1940) に郡上郡青年団の凌霜塾の支場として大日道場が蛭ヶ野で開設され、約 6ha を求めて、青少年の研修を兼ねながら酪農計画の実施に着手をした。

太平洋戦争が激しくなると、各地の食糧増産が強力に推進されるようになり、特にじゃがいもの種子が北海道から移入された。そこで、蛭ヶ野は採種圃場として大日道場の用地を中心に 18ha、上野で約 6ha、切立上野で約 3ha が、近接住民によって伐採された。開墾には、各地から農兵隊として県内の学生及び郡内の各町村の住民が動員された【2-6-9】。しかし、やせ地に少量の金肥のみで行う農作は、効率が上がらず、生産も原種子の 3 倍弱に過ぎなかった。その他にも、焼き畑式の開墾で、ソバなどが作られていた。



2-6-8 村内で行われた開拓位置図



2-6-9 郡上農林学校の生徒による蛭ヶ野開拓の様子 (昭和 16 年)

③戦後の開拓

昭和20年(1945)の終戦を迎え、国内の食糧不足の危機と従軍復員者・在外引揚者の生活安定を図るため、昭和20年(1945)11月に緊急開拓実施要領が制定され、清水実文村長(当時)は自ら高鷲村総合開拓団長として、戦時中から開墾をしていた蛭ヶ野、上野、切立3地区の馬鈴薯採種圃を基盤とした村内の総合開拓を進めた【2-6-10】。



2-6-10 戦後の開拓の様子

連合国軍最高司令官総司令部(GHQ)による国内開拓を指令により、高鷲村は上記の3地区を開拓地として指定されたが、現実的には用地の調達が困難を極め、関係地主の反対があったため、関係地主との調整が図られ、数年を経て土地売渡式が行われた。

まず、蛭ヶ野地区では、508haの開拓をすることになり、昭和21年(1946)に各種復員戦災者らによる大日開拓団員、郡上村開拓団員、満洲^{こんしゅん}琿春高鷲開拓団が合流して新しく大日開拓団を組織した。上野地区では、440haの開拓をすることになり、主に鷲見地区の次男・三男を重点においた入植となった。切立地区は、230haの開拓をすることになり、地元・戦災・復員・一部外地引揚げ等で構成された。なお、切立地区は昭和34年(1959)の自衛隊演習場問題以来、国や県からの指導援助が受けられなくなり、演習場問題を返上した昭和42年(1967)までに全戸離農した。

開拓組織も、当初は3地区それぞれで開拓団を設立したが、昭和22年(1947)に蛭ヶ野と上野が合併するも、昭和23年(1948)にふたたび蛭ヶ野と上野が分離した。そして、昭和32年(1957)には県の指導により3地区の開拓組織が合併し、大日山麓開拓農業協同組合として再発足した。そして、国の代行地として、県が直接管轄し指導をしたこともあって、開拓地の調査・未墾地の買収、施設の建設、土壌改良、営農、組織指導などの広範囲にわたる支援があった。その後、昭和49年(1974)5月に大日山麓開拓農業協同組合が解散し、27年の歴史に幕を閉じた。そして、当時の高鷲村は蛭ヶ野と上野の開拓碑を建立した【2-6-11】。

①正成成田碑



江戸時代後期、この一帯を開墾した鷺見中左衛門保隆父子が建てた記念碑で碑面には和歌が刻まれている。

②長野成田碑



大正から昭和初期の20年以上の歳月を費やし向鷺見区の長野台地に新田を開拓した功績を称えて昭和25年10月に建立された。

③大日道場跡碑



戦時中、青少年の研修として開拓と酪農に取り組んだ大日道場を偲んで、昭和58年に建立された。

④満州開拓の拓魂碑



昭和54年9月、満州開拓の犠牲者鎮魂のため、高鷺小学校校庭の東角に拓魂碑が建立された。

⑤折立開田記念碑



折立地区の開田区画整理事業が終わったことを記念して昭和35年に建立された。

⑥高鷺村開拓記念碑



開拓事業を永く記念するために、昭和53年村内の三開拓地区の総合開拓碑として建立された。

⑦蛭ヶ野開拓記念碑



ひるがの高原の開拓を記念して、ひるがの白山神社境内に昭和57年建立された。ひるがのの村づくり理念を起草した満州郡上開拓団の辻村徳松副団長の遺詠が刻まれている。

⑧上野開拓記念碑



昭和59年上野白山神社の境内に、入植関係者によって建立された。開拓一世夫婦の氏名を刻み、その労苦に感謝している。



2-6-11 村内開拓記念碑位置図

④開拓地の新しい取り組み

蛭ヶ野への道は、昭和15年（1940）に穴洞から西洞を経て通じる白川街道の大改修が行われ、昭和39年（1964）に御母衣ダムや国体開催によって道路整備されて、交通の便が格段に良くなった。開拓地では、酪農を目指した開拓はさまざまな努力がなされ、雪・牛乳・大根という3つの「白」を基にした産業へ発展し、いわゆる「三白産業」を支えるようになった。

まず、大根については昭和26年（1951）に漬物用の大根が高冷地野菜としてつくられ、漬物加工して、出荷をしていたが、伸び悩んでいた。昭和34年（1959）の伊勢湾台風による野菜不足をきっかけに生大根づくりを本格的にはじめ、大根生産を行う農家が増え、大根の生産量も増えていった。その後、大根の病気を防ぐ努力や新鮮さを保って輸送する努力などを重ね、今日「ひるがの高原大根」として各地の市場で高い評価を受けることになった【2-6-12】。

酪農については、寒い気候と酸性の強い土のため、土壌改良を行って何年もかけて牧草地づくりを行った。昭和29年（1954）には、乳牛59頭から飼育を始めて、本格的な酪農を行うようになった。そして、2年後の冬によりやく牛乳の出荷を行った。そして、「ひるがの牛乳」や「ひるがの高原牛乳」のブランド名として広く広がっている。【2-6-13】。また近年では、地元でこの牛乳を原料にしてチーズやソフトクリームなどの製品の開発・販売が行われており、新たな取り組みを行っている。

最後に雪については、昭和39年（1964）に蛭ヶ野地区にスキー場が開設されたのを契機に、昭和46年（1971）に大鷲地区にスキー場が開設され、現在は6か所にスキー場がある【2-6-14】。また、開拓地を中心に夏の涼しい気候を生かした別荘地やキャンプ場などが整備された。上野地区では、平成8年（1996）に自然と動物と食のテーマにしたテーマパークが開設された。そして、東海北陸自動車道の開通やひるがの高原スマートインターチェンジの設置により、交通の便が格段に良くなり、観光地として広がりを見せている。



2-6-12 ひるがの高原大根



2-6-13 酪農



2-6-14 大根畑とスキー場

2) 建造物

① 蛭ヶ野白山神社

昭和21年(1946)に蛭ヶ野地区で、開拓がはじまって以来、入植者の間で、神社建立の願望が強かったが、未だそこまでには及んでいなかった。神社拝殿内にある昭和34年(1959)の日付で書かれた由緒書によれば、御母衣ダム建設の際に、大野郡莊川村(現高山市莊川町)及び同郡白川村の一部が水没することとなり、白川村尾上郷地区の氏子の中で、尾上郷神社の譲受の約定が成立し、昭和33年(1958)に蛭ヶ野へ移築されたとある。部材も相応に古いことから、移築当初のものと考えられている。同年11月には長滝白山神社の御祭神の分神を奉遷した。昭和45年(1970)には鮎走白山神社より拝殿を譲り受けて、続いて鞘堂も建立された。『高鷲村史 続編』(昭和61年(1986))によれば、本殿は、奥行1.5m、間口1.5m、拝殿は奥行9.1m、間口9.1mある【2-6-15】。



2-6-15 蛭ヶ野白山神社

② 上野ため池

上野地区では水の確保が必要だったため、ため池計画が何度も陳情されていた。そして、昭和26年(1951)に水田23.7ha、ため池の貯水量8万3000トンの大規模ため池計画が認可された【2-6-16】。ただ、工事では手作業であったこと、地盤不良によって工事が中止され、工事計画の修正を余儀なくされたことで時間がかかり、7年余りの歳月を経て昭和32年(1957)に上野ため池が完成した【2-6-17】。また、昭和48年(1973)年に当時の郡上県事務所が高鷲村に依頼をした用排水路調査の項目に、上野ため池の項目があり、高鷲村もこの項目に回答をしている。このことから、すでに当時から上野ため池が、農業用水の役割として認識されていたことがわかる。

また、蛭ヶ野においても水田が計画され、濃野谷に用水ため池が、かますたに 吠谷より導水路が完成した。板橋地区においても、しょうかわむらののまた 莊川村野々俣(現高山市莊川町野々俣)から導水した。



2-6-16 昭和20年代の工事写真



2-6-17 上野ため池

③開拓記念碑

高鷲地域には、近世後期からさまざまな場所で新田開発や戦後の大規模な開拓事業が行われており、各所に開拓等を記念した石碑が建てられている【2-6-11】。ひるがの及び上野地区においては、終戦当時の高鷲村長清水実文氏が病苦を押して開拓事業を形づくった功績を称し、昭和27年（1952）に同年の刻銘の入った「清水実文翁碑」が上野に建立された【2-6-18】。現在は上野白山神社の境内にある。また、昭和49年（1974）5月に開拓事業を行った大日山麓開拓農業協同組合が解散をした。当時の高鷲村では、村内の開拓事業が戦後の村勢を占めた意義の極めて大きかったことを記念し、永世に伝えるために昭和53年（1977）に蛭ヶ野地区に開拓記念碑を建立した【2-6-19】。現在は、蛭ヶ野白山神社の隣にある。そして昭和53年（1978）には、上野地区においても同地区の入植者によって開拓碑が、上野白山神社の側に設置されている。



2-6-18 清水実文翁碑



2-6-19 開拓記念碑（ひるがの地区）

④旧大日山麓開拓農業協同組合事務所・凌霜塾大日塾跡

高鷲町ひるがの地域には、昭和33年（1958）に合併して誕生した大日山麓開拓農業協同組合の蛭ヶ野事務所があった【2-6-20】。現在は、当時の建物の5分の3ぐらいを残している。なお、現在個人所有の建物となっており、外観や建物内の構造はそのままとなっている【2-6-21】。この建物の前には、昭和15年（1940）に凌霜塾の支場として蛭ヶ野地区に大日道場が開設され、青少年の研修を兼ねた開拓事業が行われていた。現在は、昭和58年（1983）に跡地に石柱碑が建てられている。

2-6-20 大日山麓開拓農業協同組合事務所
（昭和33年以降）

2-6-21 旧大日山麓開拓農業協同組合事務所

⑤上野白山神社

昭和21年(1946)に上野地区の開拓事業が始まって以来、氏神としての神社建立の願望が入植者の間に起こってきた。そこで、大鷲白山神社の社棟1基を譲り受け、昭和27年(1952)6月に長滝白山神社御祭神の分神を奉遷し、昭和28年(1953)には鎮座祭が行われた【2-6-22】。昭和38年(1963)には中部電力の導入時に古電柱を建築材として鞘堂を建立した。後に、昭和52年(1977)に神域を拡張整備し、本殿、幣殿の新築を行った。『高鷲村史 続編』によれば、本殿は、神明造で奥行1.5m、間口1.8m。幣殿は、平屋建で奥行5.4m、間口10.8mある【2-6-23】。また、境内には昭和27年(1952)の刻銘の入った「清水実文翁碑」【2-6-18】、昭和59年(1984)の刻銘の入った上野開拓記念碑「上野を拓く」がある(【2-6-11】の⑧)。



2-6-22 上野白山神社鎮座祭(昭和28年)



2-6-23 上野白山神社

3) 活動

①大根の生産活動

高鷲地域における大根栽培は、昭和25年(1950)年に県の技師から高冷地野菜の生産することが最適の指導を受けて、翌26年(1951)に蛭ヶ野で2haの大根作付けが始めである。当初大根は漬物用として栽培されていたが、品質と輸送の問題でうまくいかなかった。昭和29年(1954)に上野地区でも、本格的な大根栽培の取り組みを行い、漬物加工場も建設して行うも作付面積が1.5haのわずかであった。その後、数年間は切立地区でも栽培をはじめ、品質の向上に努めていたが、輸送手段と販売場の諸問題でうまくいかなかった。昭和37年(1962)に従来の漬物をやめて生食用で販売をはじめると、予想外の収益となって、これをきっかけに生出荷へ転換することになった【2-6-24】。



2-6-24 JA上野ひるがの大根出荷場

本格的な大根栽培が始まると上野・切立・西洞でも大根栽培を始めて、生産規模を拡大した。一方、葉が黄色になって生育が悪くなる萎黄病いおうびょうが発生し、生産者を悩ませることと

なった。県の農業指導員の指導の下、生産者とともに土壌の消毒、堆肥の投入、土壌診断を徹底することで、萎黄病の発病面積を減少させることになった。また、生産組織についても、個人の直接出荷、仲買問屋や農協に出荷などの形態がとられていたのを統一するために、昭和43年（1968）に高鷲村高冷地そ菜生産組合、昭和50年（1975）に高鷲村高冷地野菜生産協議会を結成して、指導・清算の一元化を図った。また、同年に高鷲村高冷地そ菜生産組合を高鷲村高冷地野菜生産出荷組合（現ひるがの高原だいこん生産出荷組合）に改称し、上野地区全体で大根産業を発展させていくための体制が整えられた。こうした努力が実り、昭和47年（1972）のNHK日本農業賞、岐阜県知事賞、岐阜県農協中央会長賞を皮切りに、昭和54年（1979）に中日農業賞、そして同年に天皇賞及び農林水産大臣賞を受賞するに至ったのである。

現在、出荷組合は21名で、約80haの栽培規模で生産に取り込んでいる。大根の生産は、4月上旬から土壌の消毒、肥料やり、畝立てをして、4月15日前後から播種を始める。気候に合わせて、季節ごとに品種を変えながら、8月中旬までに順次播種をしていく。播種をして10日ないし2週間くらいして間引きを行う。その後、畝立てや追肥、農薬撒きを行い、6月中旬ごろから収穫をする【2-6-25、26】。収穫作業は、6月中旬から10月半ばまで行われ、全ての大根を集約し終わると、連作障害による萎黄病や黒斑細菌病などを予防するために秋のうちに土壌消毒を行い、ビニールシートをかぶせて保温する。収穫期は、朝2時ごろから大根収穫を行い、各農家もつ作業場に運び、水洗い、選別、箱詰を行い、箱詰された大根は集出荷場へ運ばれている。



2-6-25 大根畑



2-6-26 大根畑

一方で、生産者の高齢化や担い手不足が深刻となり、平成10年（1998）頃をピークに生産面積及び生産量が減少をしている。そのなかで、外国人技能実習生を雇用し大規模生産を行ってきたが、新型コロナウイルス感染症の影響により、外国人雇用が困難となった。このため、地場産業である観光業などから労働者を担う方針に転換し、JAも農業求人を行うなどの取り組みをしている。新規就労者の即戦力として技術の習得や作業の効率化を図る等の課題があった。そこで、令和2年度から、岐阜県、郡上市、JA、そして大根生産会社の4者が共同して、スマート農業技術の導入した地域雇用創出モデルの実証実験を行っており、トラクターの自動運転やリモコン式草刈り機を導入し、畑地センサを設置して圃場管理などを行い、新しい営農技術体系の転換の試みが行われている。

②酪農の生産活動

昭和 20 年代の開拓当初から酪農を将来の営農基本方針として進めていたが、牧草栽培や乳牛飼育に多額の費用が要するなどの困難な条件が伴った。また、入植者の食糧確保の点から、当面は水田造成に専念をしていた。ようやく昭和 29 年（1954）には、乳牛育成組合が組織され、神奈川県から生後 6～10 か月の乳牛 59 頭が導入され、蛭ヶ野・上野地区で酪農経営に着手した【2-6-27、28】。昭和 31 年（1956）からは牛乳を美濃加茂市の森永乳業工房へ出荷を始めた。ただ、出荷量が少ないため、2 斗入りの乳缶に入れ、バスで北濃駅まで送り、北濃駅から貨車で美濃加茂へ送っていた。輸送時間がかかるため、翌年にはトラック輸送となった。ただ、豪雪地帯のため、冬場のトラック輸送が難しく、乳缶 3 つをそりに乗せて運んでいた。昭和 38 年（1968）の三八豪雪では、そりに乳缶を北濃駅まで輸送する期間が 1 か月続いたという。昭和 28 年（1953）にはサイロ【2-6-29】が登場し、最初は共同で使用していたのが、次第に各戸でもつようになった。

昭和 40 年代になると、蛭ヶ野地区では観光開発事業が急速に進み、上野地区では大根栽培への転化、切立地区は昭和 42 年（1967）までに全戸離農した。一方で上野地区では昭和 40 年（1965）にパイプラインによる送乳が始まり（昭和 45 年（1970）まで使用した）、人工授精が昭和 45 年頃から行われ、乳質向上に向けての努力が進んだ。昭和 51 年（1976）には個別搾乳が始まり、北美濃酪農農業協同組合連合会へ送られ、各メーカーへ卸された。現在は、美濃酪農農業協同組合連合会の「ひるがの牛乳」が販売されている。また、森永乳業で直接の取引を行い、こちらにも「ひるがの」を冠した牛乳の生産が行われた。そして、昭和 62 年（1987）に中日農業賞、農林水産大臣賞を受賞した。

現在、酪農家の高齢化が進み、後継者不足という問題が発生している。こうした酪農家のなかには、飼育する乳牛から肉用牛へ転換する人もいた。基本的な飼育の様式は変りがないため、酪農家が減少していった。一方で酪農を続ける人、乳牛と肉用牛を一緒に育てる農家もいる。

昭和 50 年代には、全国的に行われた生乳の生産調整が、高鷲地域でも昭和 61 年（1986）に行われるようになった。このため、余乳対策としてチーズ研究会が結成され、チーズ作り



2-6-27 酪農経営のはじまり



2-6-28 牧草地の景観



2-6-29 酪農サイロ

を行っていた。この活動により、平成12年(2000)には第3セクターとして「たかすファーマーズ」が設立され、チーズに限らず、「ひるがの高原牛乳」や乳製品の商品化を行って販売するなどの様々な取り組みを行っている【2-6-30】。

さて、酪農の仕事は1年単位で考えると、牧草の収穫、サイレージ、牧草づくりである。これを年3回(主に6月、8月、10月)行っており、収穫には現在トラクターを使っている。刈り取られた牧草は乳酸発酵した粗飼料であるサイレージにしている。これ以外にも飼料としてのトウモロコシを栽培したりしている。3回の収穫が終わると、11月に集めていた糞尿や肥料を牧草地に散布する。1日の主な仕事は、早朝に搾乳・餌やり・糞尿の処理を行い、日中は休憩をとり、夕方は再び搾乳・餌やり・糞尿の処理を行う。牧草の収穫期には、草刈りや飼料作物の収穫などを行っている。



2-6-30 ひるがの高原牛乳

③蛭ヶ野白山神社大神楽

昭和33年(1958)に、蛭ヶ野の開拓地に白川村の尾神郷から神社が移転された際に、太鼓や神楽道具1式をもらった。最初に昭和34年(1959)9月16日に祭礼日と定めて、地芝居などで祭礼を行っていた。このため、神楽舞を習う経済的・時間的余裕がなかった。そのような中で、昭和45~46年(1970~1971)にかけて、岐阜・名古屋・関・白鳥に移り住んだ尾神郷の氏子に越中の神楽の系統を習って昭和48年(1973)に始まった。また、昭和49年(1974)には蛭ヶ野の青年団を中心とする団体“やろう会”のメンバーが獅子舞を譲り受け、奉納したのが始まりである。

以上の経緯から、郡上の他の地区と異なる獅子舞である。「むかで獅子」「けんか獅子」ともいわれている。獅子の前で、花取りという子役が獅子と掛け合いながら舞う獅子は、加賀獅子の流れをくみ、富山地方(特に氷見獅子)を元に庄川水系の集落を遡ったものといわれている。また、獅子だけで舞う「飛び獅子」「へんび取り」は飛騨から入ってきたものといわれている。獅子舞は、昭和59年(1984)頃にひるがの獅子舞保存会が発足して、獅子舞の奉納を行っている。そして、同保存会ではひるがの獅子舞子ども教室を開催し、大鷲白山神社の子ども教室と同じく、文化庁の伝統文化親子教室事業を活用している。

祭礼前日は、夜に蛭ヶ野白山神社裏手にあるステージで前夜祭が行われ、その中で獅子舞が奉納されている。祭礼当日は、午前氏子総代宅から始まり、獅子舞奉納を希望する家、ひるがの地区や上野地区のテーマパーク、商業施設をまわり、最後に板橋のお宮で獅子舞が奉納される【2-6-31】。午後は、ひるがのの集会場から蛭ヶ野白山神社まで練を行い、神社へ到着後



2-6-31 板橋のお宮での獅子舞奉納

は神事の後に獅子が奉納される。最初に境内に入場する「宮参り」が行われ、次に「吉崎獅子」「京振り」「へんびとり」「獅子ごろし」などの演目を行い、全ての舞が終わると境内から退場する「宮下がり」をして終了する【2-6-32～34】。ちなみに、各演目の終わる事におひねりが投げられ、それを花取りの子役や獅子舞の演者が集めている【2-6-35】。



2-6-32 京振り



2-6-33 へんびとり



2-6-34 獅子ごろし



2-6-35 投げられたおひねりを拾う役者

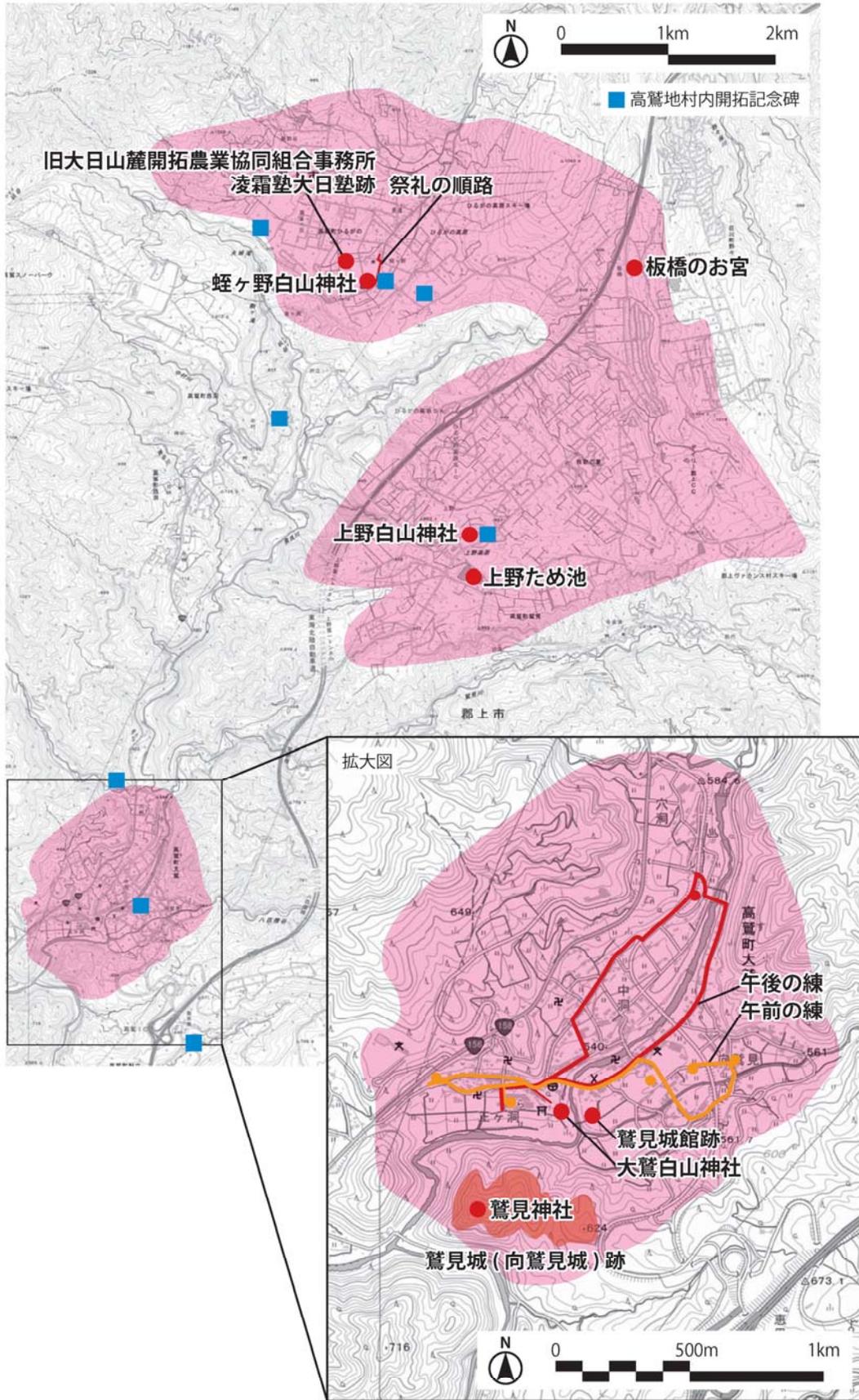
なお、市の教育方針に、「郡上のこれまでと今を学び、郡上のこれからを考え・行動することで、ふるさとの未来を創拓する人材を育てる」ことを目的する「郡上学」があり、ひるがの地区や上野地区などを学区としている高鷲北小学校では、開校当時からふるさと学習の一環で2年生以上が「祭笛」に取り組んでいる。学区の地区の祭笛を地域の人に教えてもらい、運動会で獅子舞と祭笛の発表を行い、各地区のお祭りにも参加して上演をしている。

(4) おわりに

高鷲地域は、他の地域とは異なり歴史は古くからあるものの、現代につながる事績が中世の鷲見氏の伝承、鷲見氏のゆかりの地名、そして現代の開拓を中心とする「三白産業」という特色がある。特に開拓事業については、高鷲地域に「たかす開拓記念館」が開設されているように、非常に大変な苦勞の結晶として、今日の農業、酪農、そして観光業につながっている。

また、祭礼にみられるように地域が1つにまとまるという側面ももっていた。大鷲白山神社の祭礼は元々4つの神社を明治に合併したという経緯があり、当時は別々の村の祭が1つにまとまるということであった。昭和後半に入って設立した保存会は、これまで各地区で指導していたのをまとめたことで、より一体性を生み出している。また、ひるがの地区についても、開拓で始まった地区でもあるため、さまざまな地域の出身者で構成されていたことから、ある獅子舞の演者の回顧録に獅子舞が蛭ヶ野を1つにしたと長老からいわれたという記載がある。

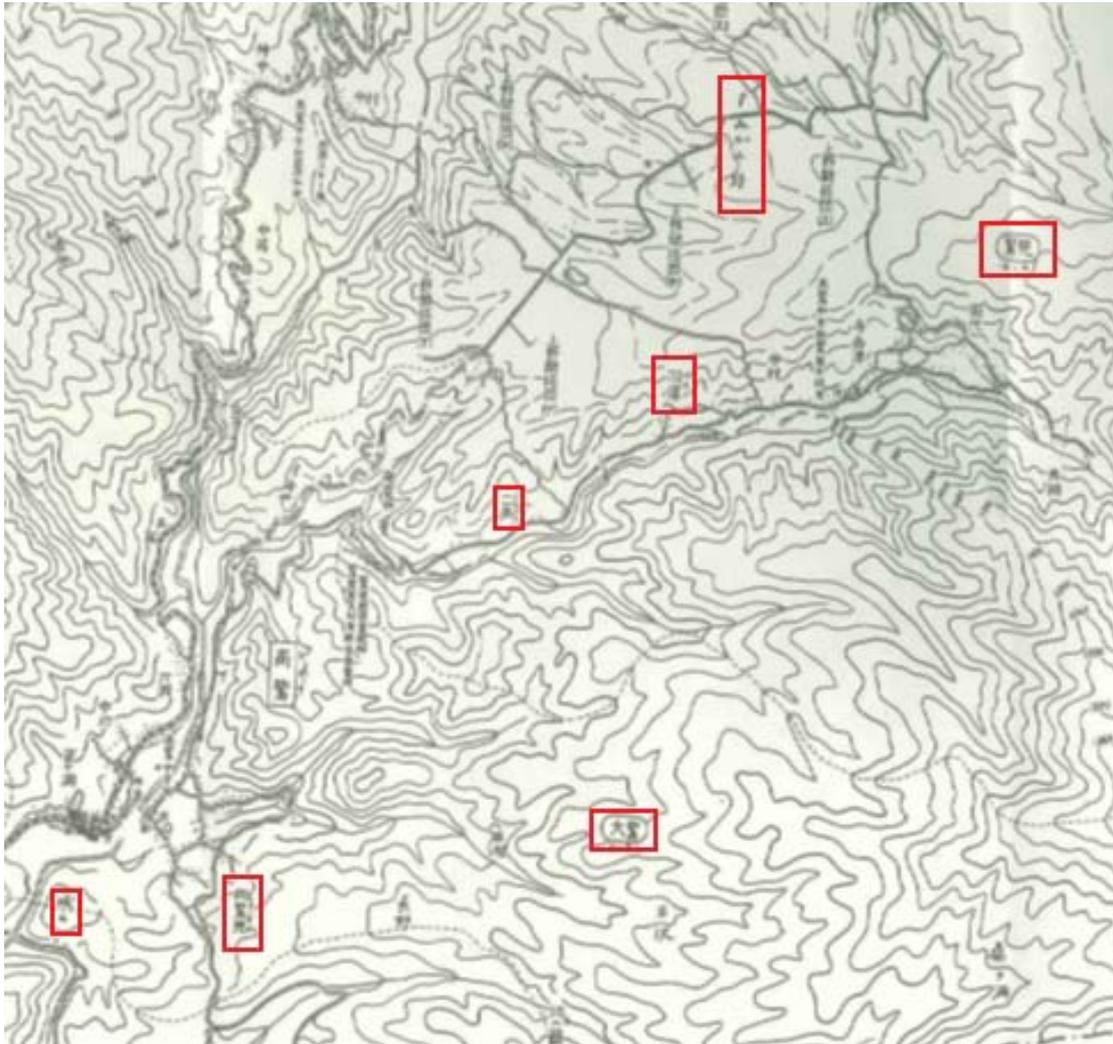
このように、さまざまな歴史を残しながら現在の高鷲地域の礎にもなっている鷲見氏ゆかりの地と開拓にみる景観は、今後も維持・向上すべき歴史的風致であるということができる。



地理院地図（国土地理院）に歴史的風致の範囲、要素を追記して作成

2-6-36 鷲見氏ゆかりの城跡と開拓の地にみる歴史的風致の範囲図

コラム 地名・字名に残る鷺見氏伝承【2-6-37】



2-6-37 鷺見氏の伝承の残る地名

明治30年(1897)に大鷺村、鮎立村、鷺見村、西洞村の4村の組合村が合併して、高鷺村となった。その際、行政区画の大字と小字が定められ、大字及び名称は旧村名をそのまま使用した。小字は地租改正時の字名としたが、由来のある名称がそのまま使われているものが多い特徴がある。この由来も、白山信仰と鷺見氏にまつわるものがあるが、ここでは鷺見氏に関する地区名や小字名を紹介する。

○向鷺見地区

向鷺見については、真観寺文書による白山信仰の開祖泰澄の来村にまつわる一節に「中島」とあり、当初は中島と称していたのが散見される。では向鷺見はどうしてなったのか『鷺見大鑑』(宝暦年間(1751年～1764年)頃)や『濃北一覽』(嘉永3年(1851))では、ふじわらのよりやす藤原頼保をいわだかむら岩高村こざえもん小左衛門が鷺見から迎えたという件があり、それが迎鷺見(のちに向鷺見)の地名になったとある。

向鷺見地区の小字

- ・ しろやま 城山 : 鷺見氏 9 代 4 百年余りの居城のあった地
- ・ とうげ エビス峠 : 鷺見頼保が鷺退治のあかつき、小鷺の餌を捨てた地
- ・ こふたごえ 小二声 : 鷺退治の頼保が鷺の幽かな鳴き声を聞いた地

○鷺見地区

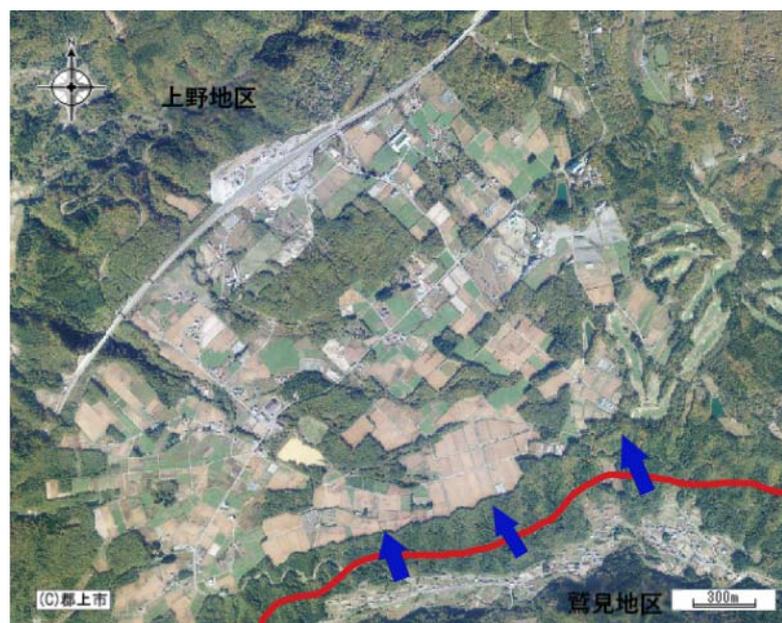
鷺見の地名は、鷺見白山神社の縁起書、『濃北一覽』、『鷺見大鑑』に関連記事があり、要約すると大鷺退治の鷺の巣を見たところという由来といわれている。

鷺見地区の小字

- ・ ふたごえ 二声 : 鷺退治のために、頼保一行が山を分け登る途中鷺の鳴き声を二声聞いた地
- ・ こじょう 小城 : 頼保が小さな砦を築いた地
- ・ はねと 羽落 : 頼保が落ちている鷺の羽 2 枚を拾った地
- ・ えぼしがけ 烏帽子掛 : 頼保が烏帽子を脱ぎ、岩に掛け休んだ地
- ・ わしがたけ 鷺ヶ岳 : 昔は雲ヶ岳と呼んでいたが、頼保の鷺退治を果たしたことによって命名された。

○上野地区

『鷺見大鑑』には、建武 3 年 (1336) の記述に「鷺見ヶ上野」という記載があり、昔は上野を鷺見ヶ上野と呼んでいたと考えられている。また、頼保の鷺退治にまつわり、霧が洞を鷺見と呼称されるようになり、鷺見村の上に広がる野を鷺見ヶ上野とたたえるようになったとある。また、鷺見村の住民が住んでいるところの上にある野であることから上野と呼んでいたのが、今日残ったと考えられている【2-6-38】。



2-6-38 鷺見地区と上野地区の上空写真

コラム 「たかす開拓記念館」

平成 28 年（2016）に開館した「たかす開拓記念館」は、「開拓＝拓く力」をメインテーマにして、当時の資料や道具、関わった人々の証言をもとに、その歴史や暮らしを展示・紹介をしている【2-6-39】。高鷲地域の開拓の歩みはすでに説明しているとおりであるが、満洲及び高鷲地域の開拓をめぐる苦難を乗り越えてきた先人の歩みと戦前・戦中・戦後の人々の暮らしとその後の地域の発展など、さまざまな観点から高鷲と開拓の歴史を学ぶことができる施設となっている。



2-6-39 たかす開拓記念館の展示室の一室

コラム 「春まちにんじん」の生産活動

ひるがので大根を生産している会社では、ひるがの高原の特性を活かした新しい農作物の生産を行っている。その 1 つがニンジンである【2-6-40】。これは、「春まちにんじん」の商品名で、秋ニンジン収穫せず、春まで雪の下で寝かしたニンジンである。東海地域のテレビ局でも紹介されることがある。このニンジンは、雪の下で春を待つ間、ニンジンは自ら凍結を防ぐためにでんぷん質を糖質に変化させることで、糖度は 10 度以上となり、果物のような甘みをもったニンジンができる。これをそのまま販売をしたり、別の会社で 100% 使用した「ニンジンジュース」にしたりして、販売をしている。これは、大根生産に限らず、新しい作物の生産を通して、新しい郡上の特産品をつくる取り組みが行われている。



2-6-40 ニンジン畑